

老休を厭はず日々に攀登し遂に霞む故山の空を慰望み  
 て二親の廟を遷葬追答なし給ひしを思へは敬慕の淚胸  
 中に迫り春光霞む其中に房州の山吾眼に映するが如き  
 心地して徐に當時の者を偲びたり堂に至れば周圍寂と  
 して堂内には但二三の信者の呟ふ題目の聲するのみ  
 吾等も内に入りて拝す心清淨として頭自然に下り真に  
 有難を感せり拝し終りて堂宇を下り元政上人埋髮の碑  
 に一拝して歸につけば天候倏忽変して將に雨ならんと  
 す急きて果道より走り下れば黒雲四散して晴天となる  
 時に久遠寺の鐘聲四時を報し吾等の登山は斯如くして  
 終れり。

# 秋の読夜の月

△ 生

式夜の事なりと叢にすれど虫の音はさきはれて出する

ともなく夜に出つれは秋の月は高く天心に澄み渡りて  
地は一面に蒼く寂ひ庭前の梧桐風なきに音なく地に落  
ちて我影あはれに映せたりあゝ思ふぞき月より汝はか  
つては同じ光に我祖の肉身を照し奉りし事もありなん  
言へ六百年前の其昔を、、、あゝされと言葉なきは只  
無心に天空を澄み渡ものみ、、、涙思はす下る、

甲府善光寺に請てし所感

溝田 玄庵

甲府在に名高し武田信玄の建立した古刹善光寺へ請て  
んと西王年心概て居たが幸に今年暑中休暇に師匠の許  
に歸つた時一日の暇を預載して其日の十時頃より出か  
けた道中畧す先づ大門の入口まで来て見れば正面遙か  
三三町も彼方に堂の巔は巖としてそびへてゐる鐵道線